JVC Japan International Volunteer Center

333 | 2018 秋

［￥500］年4回発行

TRIAL & ERROR

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

［特集］JVC国際協力コンサートの終了

ボランティアが続けた30年間の活動を振り返る

［報告］朝鮮民主主義人民共和国出張報告

何があっても途絶えさせない日朝の民間交流

［報告］ガザに緊急支援を

非暴力デモで手足が失われる

［報告］カンボジア総選挙

経済成長と強権政治の影響下にあるカンボジア

JVC国際協力コンサート、その最後の年の東京公演の舞台に立つJVC合唱団員の皆さん。30年前に一人の呼びかけで始まったこのコンサートには、その運営にこれまで数多くのボランティアが関わってきた。その代表格が、「歌声ボランティア」である合唱団員。大阪公演はコードリベット・コールが、東京公演は毎年募集して構成するJVC合唱団が担っている。

ボランティアが続けた30年間の活動を振り返る

1989年から毎年末に開催した「ＪＶＣ国際協力コンサート」は今年末の公演で30年の歴史に幕を下ろす。
30年間のコンサートは多くのボランティア――歌う人、音楽家、実行委員会、裏方等々――に運営されたという財産を残し、同時にボランティアの一人一人にも財産を残した。
惜しまれての終了に向かいつつも、関わった個人や組織の立場からコンサート活動の意義を整理したい。

国際協力コンサートの終了を新たなステップに

ＪＶＣコンサート事務局　石川 朋子

「試しにやってみよう」から始まった年末恒例のＪＶＣ国際協力コンサートは、実に30年も続けられてきた。様々な社会環境の変貌に伴い本年末に終了を迎えるが、ここにその変遷を整理する。同時に、ボランティアだけで30年も実践したその「精神」をここで絶やせないと、今回の終了を新たなステップと考え、新しい合唱団をつくる動きも紹介したい。コンサート活動は、それに関わる人と人とを結び付けていたのだ。

ＪＶＣの活動を応援したい

ＪＶＣ国際協力コンサート（当初の名称は「ＪＶＣベネフィットコンサート」）が始まったのは1989年。

時はバブル景気真っ盛り、12月の日経平均株価は東証平均史上最高値を記録し、日本でもメセナ（企業の文化・芸術活動支援）活動が急速に広がり始めたタイミングであり、昭和が平成になった年です。

コンサートが始まったきっかけは、ボランティアの一人、アイネス・バスカビルさん（現ＪＶＣ顧問、米国在住）の「ＪＶＣの活動を応援したい」というシンプルかつ、強い思いでした。

当時、アイネスさんは「国際難民支援会（ＲＩＪ）」のボランティアで、ＲＩＪのための支援コンサートを開催していて、ＪＶＣを知るきっかけは、ＲＩＪの支援先にＪＶＣが選ばれたことです。アイネスさんは「支援したお金がどのように使われるか

2013年東京公演。ステージリハーサルを終えたアイネスさん。

自分の目で見る」ことをポリシーとしており、支援先となったＪＶＣソマリアの活動の視察に行きました。１９８４年のことです。

ソマリアの活動地ルークで、現地の人への命令ではなく、その声に耳を傾け、一緒に活動するＪＶＣスタッフの働きに強く心を打たれたアイネスさんは、「この日本人の働きをもっと日本の人に伝え、応援してもらいたい」と、ＪＶＣのためのコンサートを発案したのです。

演目が宗教曲『メサイア』ということで、ＪＶＣ内では「なぜＪＶＣがキリスト教の曲を？」と議論になりましたが、当時の事務局長、星野昌子さんの応援もあり、「試しにやってみましょう」と、ＪＶＣ国際協力コンサートは誕生しました。アイネスさんと20名近いボランティア「ＪＶＣコンサート実行委員会」が実質の「主催者」としてコンサートをつくってきました。

大阪公演は、東京公演について書かれた朝日新聞の「天声人語」（92年11月19日）を読まれた猪俣寛彦氏のお声かけで94年に始まりました。

2013年、コンサート実行委員会、コンサート関係者

ＪＶＣが合唱団を運営する

コンサートのコンセプトは「音楽で国際協力」。

歌いたい人は合唱団員として、企業は協賛することで、音楽家は「Ｔａｌｅｎｔ（能力）とＴｉｍｅ（時間）をＤｏｎａｔｅ（寄付）」（アイネスさんは音楽家への出演依頼に、このようにお声かけしていた）し、音楽

を聴きたい人はチケットを買う。他にも当日ボランティアが「国際協力に参加しましょう」と呼びかけたものです。

今でこそ、「国際協力＋α」の視点で、国際協力以外の何かと組み合わせることで、国際協力への参加を促す試みは一般的になっていますが、NGOや国際協力の認知度も現在とは比較にならないほど低い時代、日本のNGOが主催する「国際協力＋音楽」のクラシックコンサートを企画したアイネスさんの先見性を感じずにはいられません。

順風満帆の船出となったコンサートは、バブル崩壊後も97年の最高収益1450万円までは順調に協賛企業とその支援額を増やしていきました。しかし、「平成不況」、「失われた10年」と言われる不況の影響を受け、その後企業協賛は減少し、コンサート事業は「経費削減」、「収益回復」が喫緊の課題となりました。

私がJVCのコンサート担当になった2002年はそのような時期でした。企業へ支援のお願い電話をかけると「あのねぇ、こっちはリストラしてるんですよ。寄付してる場合じゃないんだよ！」と言われたことも1度や2度ではありません。営業とはかくもつらいものかと思っていましたが、その後も数多く断られる中で、当時ほど「怒られる」ことはなくなり、それだけ厳しい不況だったのだと、今はわかります。

「収益回復」案の一つは「JVCが合唱団を運営する」でした。

東京公演の合唱団は、初回から郡司博先生（指揮者、合唱指導者）が運営、指導すべてを担当してくださっていましたが、この案はその郡司先生からのご提案でした。

ところが、「合唱団運営など、素人のJVCにできるわけがない」、「郡司先生なしでは絶対にコンサートは続かない」など、内輪のJVCやコンサート実行委員会から反対や不安の声があがりました。

さわさりながら、他に選択肢がない状況でもありました。議論を重ね、結論も行ったり来たりする状況の私たちが、星野さんに相談した際に言われたのが次の言葉です。

「今がベスト、もう完璧、と思った時点でその団体（活動）は硬直する。もっと良くなるには？と常に考えることが大切。創造的混沌はその時々において必要なこと」

この言葉が、変えることの不安で立ち止まっていた私たちの背中を押してくれました。04年、「JVC合唱団」が事務局責任者として柴大元氏、指導者に青木洋也氏を迎え設立されました。このJVC合唱団は、「音楽で国際協力」の特徴をさらに強めてくれました。

2018年9月末のJVC合唱団合宿、練習風景

収益の回復見込みを立てられず、終了へ

JVC国際協力コンサートは、今年12月の演奏を最後に終了します。

「コンサート終了」。その決定までの話し合いが始まったのは15年末でした。会場や出演者の調整のために、16年度内には方向性を見出す必要があります。JVC内部の議論とともに、柴氏、青木先生、大阪の合唱団コードリベット・コール他、コンサート関係者などにもアドバイス

JVC国際協力コンサートのこれまで

1989年	アイネス・バスカビルを中心に『JVCベネフィット・コンサート』が東京で始まる。楽曲はヘンデル『メサイア』。
1992年	朝日新聞「天声人語」で東京公演が紹介。
1994年	「天声人語」をきっかけに大阪公演開始。公演名を「JVC国際協力コンサート」に変更。
1997年	89年以降、初めて『メサイア』以外の曲、J.S.バッハ『クリスマス・オラトリオ』を演奏（大阪公演）。収益が最高額の14,500,000円に到達。
2004年	JVC合唱団設立。運営責任者に柴大元氏、合唱指揮者に青木洋也氏が就任。
2006年	東京公演でもJ.S.バッハ『クリスマス・オラトリオ』（全曲）を演奏。
2013年	25周年を機に創設者アイネス・バスカビルが、コンサート実行委員長を退任。
2014年	青木洋也氏JVC国際協力コンサート音楽監督就任。
2018年	東京公演30年、大阪公演25年でフィナーレを迎える。

を聞くなど、話し合いを進めました。

正確には、13年、アイネスさんが実行委員長を引退した年から、この議論は始まっていました。創設者であり、コンサート実行委員長としてリーダーシップ、カリスマ性をもってコンサートを牽引していた彼女の引退後、「JVCはコンサートを続けられるのか?」との声が聞こえてきました。

議論においては、スタッフから「アイネスさんが辞めるからといってやめるのは違う。JVCのコンサートとして続けていきたい」、「コンサートがあるからつながれる人がいる、コンサートはJVCの宝」などの声があり、「続ける前提」で確認作業が行われました。そして決めたのが、いくつかの「継続の条件(支援企業数、収益、先の見通しなど)」を設定し、まずは「次の周年まで5年続けよう」ということです。

15年からの議論は、具体的な「継続条件」や数字を出して進めました。だが目指す収益には到達せず、その解決案も浮かんでは消えていきました。割引をもってコンサートを支援くださっていた両ホールからも、現条件維持が難しいことが伝えられました。一方、数字だけではない広報的なコンサートの価値、JVC内でのコンサートの存在の大きさは、決断をさらに難しくしました。

予定以上に時間はかかりましたが、東京公演は17年5月、大阪公演は10月末に終了を決定しました。主な理由を一言でいうと「収益の減少」になりますが、コンサートを取り巻く環境も変化し、JVCに今の収益を回復させコンサートを維持していく力はありませんでした。

新しい合唱団をつくる!

コンサートのテーマの一つは「ボランティア精神」です。コンサートを始めたのが、ボランティアのアイネスさんと約20名のJVCコンサート実行委員会であったように、この30年、東京と大阪でコンサートを支えたのはすべてボランティアでした。

JVCは「ボランティア」を「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」と定義し、団体名にも使っています。合唱団員は「歌声ボランティア」、当日の裏方は「当日ボランティア」、コンサート実行委員会、本当に数多くのボランティアがこのコンサートをつないでくれました。

コンサートは、これまで2億6000万円超ものお金をつくってきましたが、それ以上の財産が、このコンサートを通してJVCを応援してくださっている「人」です。コンサートの終わりが決まり、この「人」とのつながりをどう維持していけるかが最重要課題となっています。

その模索のなか、合唱団関係では、次のタネがまかれようとしています。JVC合唱団の有志数名が、「国際協力のために歌う」というスピリットをつないでいきたい、と、新しい合唱団(名称未定)作りに動いています。コードリベット・コール(大阪の合唱団)は、今回のフィナーレを「JVCが新しいつながりを作るための区切り」とし、自主公演との連携を考えてくれています。ボランティア精神は、受け継がれていきます。

フィナーレのコンサートは、間もなく開演です。古楽の本場オランダで、世界最高峰の古楽アンサンブル「オランダ・バッハ協会」の音楽監督を35年務められた巨匠ヨス・ファン・フェルトホーフェン氏が来日します。JVCのコンサート史上、最も再演が待ち望まれた指揮者です。最後の演奏をステージと会場のみんなで一緒につくりましょう! ぜひご来場ください。

JVC国際協力コンサート 2018

チケット好評発売中

30周年記念 東京公演

ヘンデル『メサイア』(全曲)

2018年12月1日(土) 昭和女子大学人見記念講堂 15時開演

[SS券]10,000円 [A券]5,000円 [B券]4,000円 [C券]3,000円 **完売**

25周年記念 大阪公演

バッハ『クリスマス・オラトリオ』(第1−4部)

2018年12月8日(土) いずみホール 14時開演

[SS券]10,000円 [A券]5,000円 [B券]4,000円

ＪＶＣ国際協力コンサート２０１８に寄せて

いよいよ本年末で終了となるＪＶＣ国際協力コンサート。ＪＶＣの活動を支援する目的で始まったコンサートも、続けるうちに様々な人と人との出会いを紡いできた。長年携わっている人びとのなかには寂しさもある一方で充足感もあるようだ。それぞれの思いを語ってもらった。

ＪＶＣ国際協力コンサート２０１８に寄せて

ヨス・ファン・フェルトホーフェン（指揮者）

ＪＶＣコンサートに指揮者として招待されるのは、今回3度目になります。

このコンサートは、ＪＶＣの1980年の創設以来の目標――人びとが互いに調和して暮らし、紛争の犠牲者を救うために貢献する――を実現する大きな助けとなるでしょう。

この重要事業を支えるための来日は、私にとりまして大いなる栄誉であり大変光栄に思います。ＪＶＣの素晴らしい目標の達成に向け、人びとを刺激するのに最もふさわしいものは、人の心へ直接響く音楽以外にあるでしょうか？

私は、バッハの音楽と、ヘンデルのように、彼と同時期に活躍した作曲家たちの音楽を学ぶことに生涯を捧げてまいりました。そして、18世紀のこの古楽が、依然として、実に人びとを動かし、美しさ、強さ、快適さ、そして喜びを与えうる絶対的な強さと能力をもっていることに気付きました。『メサイア』と『クリスマス・オラトリオ』は、この古楽のなかでも最高の作品であり、クリスマス前の数週間がこの音楽を演奏するのに最適な時です。

私のホーム・アンサンブルはオランダにあります、オランダ・バッハ協会です。もし、私の音楽人生にご興味をお持ちいただけましたら、All of Bach.com をご覧ください。ここでは、バッハの250曲以上の作品を無料視聴できます。これらは、ヨーロッパの最も素晴らしい音楽家によって、最も美しい場所で録音されました。

地球上の人びとのハーモニーは、私たち音楽家が音楽を演奏する時、ステージ上で感じるハーモニーとよく似ています。バッハとヘンデルは、大いなる情熱と思索を作品に吹き込むことに成功しました。私たち音楽家は、それらを2018年の現代に蘇らせる責務を覚えています。到底簡単にできることではなく、多くの才能、献身、準備、リハーサルが必要とされます。

しかし、それらが成功し、その音楽が人々の心に染みこむとき、言葉に頼ることなく、より良い世界の実現につながるすばらしいハーモニーが生まれるでしょう。私たちがヘンデルの『メサイア』とバッハの『クリスマス・オラトリオ』を演奏するコンサートホールにおいても。また、ＪＶＣが人々の〝ハーモニー（調和）〟に取り組んでいる世界においても。

ＪＶＣのクリスマス

秋田 美喜子（合唱団員・大阪）

Jauchzet, frohlocket!（歓びの叫びをあげよ！）

この歌詞から始まる『クリスマス・オラトリオ』。私は、大阪の合唱団「コードリベット・コール」に入団し、この曲を最初に練習した時、「なんて乱暴な曲だろう」とびっくりしたものです。だっていきなりソ（G）の音で、Jauchzet!って叫ぶんですよ。それまで、マタイ、ヨハネ、ロ短調ミサを歌っていた私にとって野蛮な曲でした。

それがヨスさんに指揮して頂いた05年、Sinfoniaを聞いていたら突然目の前に平原と羊の群れが現れて、感動！ その時から、この曲は私にとっても特別なものとなりました。

ＪＶＣ国際協力コンサートにこの曲が取り入れられたのは97年。我がコードリベット・コールにとって最高の喜び。この曲は我が団が67年より毎年歌い継いでいた曲だったからです。団員はほとんど暗譜しており、息をするように歌っています。

そんな私たちにとって大切な曲、電話帳のように重たい楽譜とも今年でお別れ。最後の『クリスマス・オラトリオ』でヨスさんをお迎えできたことに感謝と喜びで一杯です。

ＪＶＣの音楽を通じて世界の人たちとつながれるという素敵な企画、このコンサートも今年でフィナーレ。最後で、最高のクリスマス。ぜひホールで一緒に迎えましょう！ 皆さんのお越しを心よりお待ちしております。

ＪＶＣ会員として合唱団員として

奥野 千恵子（合唱団員・東京）

女学校の同窓会での星野昌子ＪＶＣ初代事務局長（4年ほど後輩）の講演がＪＶＣとの出会いでした。

発足当初のご苦労を経て、現地の実情を読み取ったうえでの息の長い援助の方策を探りとり、それを実現していることにすっかり魅せられ、程なく会員になりました。

私自身の当時の事情もあり、10年ほどは機関誌（T&E）を読むだけでしたが、04年初頭、同誌に載ったＪＶＣ合唱団員募集で「歌ってボランティアができる」と、すぐ申し込みました。ちょうど時間的に余裕ができた時期で、『メサイア』はかねて歌ってみたいと思っていましたので。

といっても、特別の素養はなく、ただ合唱のハーモニーのなかで歌うのが好き、というだけのド素人で、初めの頃は経験豊かな方々のそばで耳から覚えさせていただき、15年が経ちました。

この度、このコンサートがフィナーレを迎えるにあたり、発案されたアイネスさんはじめ、ご指導や伴奏の先生方、また、団員の目に見えないところで運営などの苦労を重ねてくださった多くの方々のおかげで、楽しく歌わせていただけたのだということを想い、心からの感謝を申し上げます。これに報いるためにも、この最終回を最高の『メサイア』で飾らねば、と強く思っております。

昨年、「14年間で最高だった」と評した友人にさらに上の『メサイア』を届けたいです。さらに、練習の日々のなかで、多くの心優しい方々と交流でき、また、お世話になったことは、またとない幸せであったとありがたく心に刻んでおります。